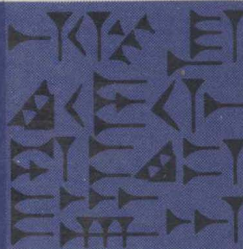


經 濟 学 史

久留間鮫造 著
玉野井芳郎



岩波全書



經 濟 学 史

久留間鮫造 著
玉野井芳郎



岩波全書 197

久留間鮫造

1893年岡山に生まれる。

東京帝国大学法科大学政治学科卒業。
経済学を専攻。現在法政大学大原社会
問題研究所理事兼名誉研究員、法政大
学名誉教授。

著書：「恐慌論研究」「価値形態論と交
換過程論」。編書：「マルクス経済学
レキシコン」

玉野井芳郎

1918年山口県に生まれる。

東北帝国大学法文学部経済学科卒業。
経済原論、経済学史を専攻。現在東京
大学教授。

著書：「リカードからマルクスへ」
「日本の経済学」「転換する経済学」

経済学史

岩波全書 197

1954年9月7日 第1刷発行

1977年4月11日 改版第1刷発行 ©

1980年6月20日 第3刷発行

¥ 1500

著 者 く る ま きめ ぞう
 た の い よし ち
 ま 野 井 芳 郎
 玉

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 巖 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・理想社 製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

改版にあたって

本書が一九五四年に岩波全書の一冊として刊行されてから、すでに二十年余が経過した。幸いに多くの読者に迎えられて増刷を重ね、紙型のいたみが甚だしくなったのであらためて組み直すことになったから、もし改訂すべき点があればこのさい改めてくれという書店からの申し出があった。そこで、次の点について改訂を行なった。

一、新字体のある漢字を新字体に、仮名づかいを現行のものに改めたほか、文章にも、平明を旨として若干の改訂を行なった。

二、しかし、最も大きな改訂を行なったのは、引用文献についてである。特に、その重要な部分をなすリカードゥとマルクスの場合には、その後、前者の場合には「The Works and Correspondence of David Ricardo. Edited by Piero Sraffa(ピトスラフ版と略記)」、後者の場合には「Karl Marx・Friedrich Engels, Werke. Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED(以下ヴェルケ版と略記)」が刊行され、現在最善の版本として流布している。さらに邦訳について見ると、旧訳の改訂版のほかに、別の訳者による新訳が、特にマルクスの『資本論』の場合には数種の新訳が現われ、しかも同じ邦訳が、机上本のほかに文庫本の形でも刊行されている。

改版にあたって

る、といった現状である。そこで、今回の改訂にあたっては、引用文献に種々の版本がある場合、それらの典拠としての適否のほかに現在における利用度をも考慮に入れながら、次のものを選んでその頁数を表示することにした。すなわち、原典については、リカードゥの場合にはスラッフ版の頁数、マルクスの場合にはすべてヴェルケ版の頁数、邦訳については、すべての場合を通じて、従前の訳の改訂版がある場合にはその最新版の頁数、リカードゥの場合には小泉訳(岩波文庫)のほかに、スラッフ版による堀訳(雄松堂版)の頁数、マルクスの『経済学批判』の場合には武田ほか数氏の共訳(岩波文庫)と杉本訳(大月書店版『マルクス・エンゲルス全集』の一部)の頁数を、『資本論』の場合には長谷部訳(河出書房版——これが最新の改訂版)のほかに向坂訳(岩波書店版)、岡崎訳(大月書店版)上記の『全集』の一部)の頁数を、さらに、向坂訳と岡崎訳とは右の机上本のほかに文庫本があるのでその頁数を、『剰余価値学説史』の場合には岡崎・時永訳(大月書店版)上記の『全集』の一部および国民文庫本の頁数をかかげた。

三、以上の改訂のほかに、新たに人名索引を付加することになった。これは、法政大学教授大谷禎之介氏の好意によるものである。この場をかりて感謝の意を表したい。

一九七六年十一月二十三日

著 者

はしがき

本書は、マルクスに先行する経済学の歴史を対象として、科学としての経済学の発展の大筋を、その主流に即してできるだけ正確に描出しようとしたものである。

経済学の歴史の大綱を知ることによって、経済学の理論にたいする理解が一段と深まることはいうまでもない。経済学史を学ぼうとする人はもとより、経済学の理論を正しく理解しようとする人にも、本書はある程度役立ちうるのではないかと思っている。またその点をも考慮して、初学の方の理解に資すると思われるような説明をも随時挿入しておいた。

はしがき

なお本書の叙述について一言しておきたい。「はしがき」、「序説」、第一—第三章および「むすびに代えて」は久留間の筆になるものであり、第四章および第五章は玉野井の執筆したものである。本文の前半は、さきに久留間が『経済学史』(河出書房刊)と題して公けにしたことがある。いまこのような形で復刊するにあたり新たに筆を加えた箇所が少なくなかった。そうした叙述全体の後をうけて、後の部分を玉野井が執筆したものであって、したがって本書は二人の共同執筆ではあるけれども、右のような観点からする一貫した叙述にもづく合作ということができる。

本書がひろく経済学の理解の一助となるならば幸いである。

一九五四年五月十九日

著
者

目次

改版にあたって

はしがき

序 説 一

第一章 概 説 五

第二章 フィジオクラシー(ケネー) 一九

第一節 概 説 一九

第二節 経 済 表 二七

第三節 フィジオクラシーの矛盾と古典学派の成立の意義 三〇

第三章 古典学派(スミスおよびリカードウ) 三三

第一節 概 説 三三

第二節	価値および剰余価値	七
一	労働による価値の規定	七
二	不等量の労働の交換	一四
三	剰余価値の源泉(付、生産的労働の概念)	二一
第三節	剰余価値と利潤	三〇
第四節	価値と生産価格	三三
第四章	古典学派の解体	三六
第一節	概説	三六
第二節	リカードウ反対の学派	四〇
一	マルサス	四〇
二	トレンズ	四四
三	ベイリー	四三
第三節	リカードウ擁護の学派(ジェームズ・ミルその他)	四三
第五章	古典学派からマルクスへの過渡	四五
第一節	概説	四五

目 次

第二節	ホジスキン	二五三
第三節	ラムジイ	二七五
第四節	ジョーンズ	二七
むすびに代えて		二四九
人名索引		

序 説

本論にはいるまえに、まずもって、経済学史を研究することにはどのような意味があるのか、とくにどのようなことを明らかにすることを主眼にして以下の叙述をすすめてゆくつもりであるかについて、一応の了解をえておきたいと思う。全体の主意を理解しておいてもらわないと、せっかく勉強されても木を見て森を見ないといったふうの結果にならぬともかぎらぬからである。

序 説

経済学史は文字どおりに経済学の歴史であるから、その研究が何よりもまず、過去の経済学説に関する正確な知識を必要とすることはいうまでもない。だが、いつ、だれが、何という書物をかき、どのような問題についてどのようなことを述べた、というようなことを、いくら正確に、またいくら応沷に知ってみても、それだけではせいぜい物識りになるだけのことで、生きた知識、本当の意味の学問にはなりえない。だから、過去の学説の研究にこうした直接的な知識をもつこと以外の意味を認めないならば、それを無用視することになるのはもとより当然である。

アダム・スミスの経済学のいわゆる俗学的な、皮相的な方面を發展させ、体系づけて、十九世紀はじめのフランスの経済学界に君臨したジャン・バチスト・セー(Jean Baptiste Say)の次の言葉は、この見解を代表するものと見ることができる。

馬鹿げた意見、まさに葬らるべくして葬られた学説をよせ集めることが、何の役にたつであろう？ それらを掘りだすことは、無益なうえにうとましいことであろう。だから科学の歴史は、その科学が完成すればするほど短くなるのである。けれど、ダランベールがいみじくもいったように、われわれがある対象についてはっきり知れば知るほど、われわれは、その対象が生ぜしめた誤った、または疑わしい見解にかかづらうことが少いからである。……誤謬は学ぶべきものではなくて、忘れらるべきものである。(Cours complet d'économie politique pratique, II, pp. 540-541)

セーは、経済学は自分の手で完成の域に達したものとうぬぼれていたので、自然こういう考え方をするようになったものと思われるが、それがひとりよがりの偏見にすぎなかったことは、彼の経済学説そのものが間もなく葬りさられたことによっても知られるであろう。おもうに、彼の誤謬の根本は、歴史的・發展的なものをそういうものとして把握することを知らなかったことである。このばあい問題なのは経済学の歴史であるが、経済学はブルジョア社会の経済に関する理論的認識にほかならない。ところがブルジョア社会の経済そのものは、けっして超歴

史的なものではなくて、発生し、成長し、変貌してゆく歴史的・発展的なものであるから、経済学がこの経済そのものの発展によって制約される発展史をもつべきことは当然のことではなればならぬ。では経済学の歴史はどのようにして、ブルジョア社会の経済の発展によって制約されてきたか？　こういうふうな問題を設定するとき、経済学史の研究はけっして「馬鹿げた意見、まさに葬らるべくして葬られた学説をよせ集める」痴人の閑事業ではなく、学説の推移のうちに客観的な法則を確認することを課題とする一個の科学になる。しかもそれは、そういう一個の科学としてそれ自体に意味があるばかりでなく、一般に経済学を研究しようとする者にとつてきわめて重要な意味をもちうるのである。けだし、それによってわれわれは、現に並びおこなわれている経済諸学派のそれぞれの歴史的社会的な存在理由を明らかにするとともに、それらのうちのどれが科学としての経済学の正統をつぐものであるかを弁別し、さらに進んでは、それがこの正統のうちにあって、前段階をあらわすものに比して、どのような理由により、どのような点で、画期的な発展をあらわすかも知ることができ、かくして、その学説についてのわれわれの理解を深めるうえに、大いに資することができるからである。

ところで、こうした見地から経済学の歴史を取扱うばあい、それがブルジョア社会の経済の発展によって制約されてきた関係を、従来のすべての異説の一々について究明しようとするならば、仕事は事実上無限になるであろう。のみならず、単に既存の研究の成果を紹介するだけ

でも、けっして容易なことではない。しかしそういう細目にわたる研究は、経済学の発展の法則の確認という特殊の目的から見れば、多かれ少かれ意味のあることにはちがいないが、右に述べた、より一般的な、経済学そのものの理解に資する目的からみれば、必ずしも必要ではない。そのためにはわれわれは、経済学の発展の主流について知れば十分である。それに初学者のばあいには、細節にかかずらうことはとかく大局の把握をさまたげるおそれがあるとも考えられる。そこで本書では、枝葉はつとめてこれをはぶき、ひたすら科学としての経済学の発展の大すじを浮き出すことを眼目にして、話をすすめてゆきたいと思っている。したがってわれわれは、この大すじに属さない学派の学説には、そういう学派がなぜできたかということを説明するためのほかには立ち入らないであろう。また、大すじに属する学派の学説にしても、雑多な問題についての一々の学説を網羅的に紹介するようなことはしないで、そのかわりに、それらの学派をして経済学史上に独自の段階を画せしめた基本的・特徴的な点について、なるべく立ち入った考察を試みたいと思うのである。

第一章 概 説

経済学は、十八世紀の中頃に重農学派を創設したフランソワ・ケネーによってはじめて学問的な体系を与えられたのであった。その以前にももちろん経済学的な論説——ブルジョア社会の経済に関する論議——は豊富に存在したが、それらはなお、直接的な政策論の域を脱しなかつたか、あるいは、時に鋭い理論的分析の試みが見られても、まだ断片的な研究の範囲を出なかつた(たとえばウィリアム・ペテ⁽¹⁾)。この意味において、固有の意味の経済学の歴史はケネーからはじまり、その以前のものは「前史」に属するものとみられるのである。

(1) ペティ (William Petty, 1623-1687) の主要な経済学的論策にはつぎのものがある。

A Treatise of Taxes and Contributions, 1662『租税貢納論』大内兵衛・松川七郎共訳、岩波文庫)。
Political Arithmetick, 1690『政治算術』大内兵衛・松川七郎共訳、岩波文庫)。
The Political Anatomy of Ireland, 1691『アイルランドの政治的解剖』松川七郎訳、岩波文庫)。

この「前史」の時代を別にすれば、経済学の歴史は大体これを三つの段階にわかつことができると思う。

第一は、封建的な生産諸関係のもとに次第に発達してきた生産力が、それらの諸関係と全面的に衝突する事態にたちいたったときに、これにかわるべき資本家的生産諸関係の思想的代表者らが、社会全体の名において、旧生産諸関係の打倒と新生産諸関係の確立とのために戦った時代に照応する。この時代の経済学を特徴づけるものとしては、自然的秩序の思想をあげることができる。曰く、現実の人為の秩序に対して、理想の自然の秩序なるものがある。自然の秩序は人類の幸福を希念する神の意志にもとづくものであつて、完全な調和の秩序である。現実の社会における種々の弊害は、人為の制度がこの自然の秩序に背反することによって惹起される。すなわち為政者の任務は、理性の力によつて、この自然の秩序とそれを支配する自然の諸法則とを「明証」し、実際の制度をこれに適合させることでなければならぬ。このようにして彼らは、そのいわゆる自然の秩序における経済運行の諸法則を明らかにしようと試みた。このようにしてできあがつたものが、彼らの経済学の体系である。

しかしながら、今日われわれが彼らの学説をその内容について検討するならば、彼らが経済上の自然的秩序としてえがきだしたところのものは、本質的には資本家的な生産の諸関係であり、彼らが自然的諸法則として説いたところのものは、実際には資本家的な生産の諸法則にほかならないことを知ることができる。すなわち、彼らは資本家的な生産の諸関係および諸法則を、神の・あるいは自然の・秩序および諸法則として、すなわち古今を通じてあやまらない絶

対不変の秩序および諸法則として、把握し提唱したのである。資本家的な生産の諸関係が、それに先だつ封建的な生産の諸関係と同じく、発生し、成長し、経過する歴史的なものであることは、今日では、多少とも資本家的偏見から脱却した人であれば誰でも認めるところであり、すくなくとも、それが調和にみちた理想的な秩序でないことは、何びとによっても否定されない明白な事実であるが、当時における革命的思想家の眼には、それが超歴史的な自然の秩序として、そしてその発展をさまたげていた封建的な諸関係は、これに対して人為の制度として映じたのである。そしてそれは、尤もなことであつたともいえる。封建的な諸関係は、なるほど彼らの時代には人為であつたに相違ない。なぜなら、それらはすでにゆきづまつていたからである。それらはもはや生産力の発展の形式ではなく、その桎梏であつたからである。それらは、ただ一部階級の単なる伝統的な勢力によって、すなわち人為によって、ようやく存在をたもつものにすぎなかつたからである。そして、この同じ事情は当然にまた、その反面において、新たに歴史を担当すべき資本家的な生産の諸関係を、彼らのまなこに自然の秩序として映ぜしめることとなつた。いなそれらは、ただに彼らのまなこに自然的なものとして映じたのみでなく、当時の事情のもとでは、ある意味では自然的であつたに相違ない。なぜなら、それらは歴史的に必然なものであつたからである。しかしわたくしは、彼らが「自然」を主張するにあたって、